**降誕節第５主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年1月28日**

**「神は人を分け隔てなさらない」**

**ヨエル書３章５節**

**3:5 しかし、主の御名を呼ぶ者は皆、救われる。主が言われたように／シオンの山、エルサレムには逃れ場があり／主が呼ばれる残りの者はそこにいる。**

**使徒言行録10章34～43節**

**10:34 そこで、ペトロは口を開きこう言った。「神は人を分け隔てなさらないことが、よく分かりました。**

**10:35 どんな国の人でも、神を畏れて正しいことを行う人は、神に受け入れられるのです。**

**10:36 神がイエス・キリストによって――この方こそ、すべての人の主です――平和を告げ知らせて、イスラエルの子らに送ってくださった御言葉を、**

**10:37 あなたがたはご存じでしょう。ヨハネが洗礼を宣べ伝えた後に、ガリラヤから始まってユダヤ全土に起きた出来事です。**

**10:38 つまり、ナザレのイエスのことです。神は、聖霊と力によってこの方を油注がれた者となさいました。イエスは、方々を巡り歩いて人々を助け、悪魔に苦しめられている人たちをすべていやされたのですが、それは、神が御一緒だったからです。**

**10:39 わたしたちは、イエスがユダヤ人の住む地方、特にエルサレムでなさったことすべての証人です。人々はイエスを木にかけて殺してしまいましたが、**

**10:40 神はこのイエスを三日目に復活させ、人々の前に現してくださいました。**

**10:41 しかし、それは民全体に対してではなく、前もって神に選ばれた証人、つまり、イエスが死者の中から復活した後、御一緒に食事をしたわたしたちに対してです。**

**10:42 そしてイエスは、御自分が生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた者であることを、民に宣べ伝え、力強く証しするようにと、わたしたちにお命じになりました。**

**10:43 また預言者も皆、イエスについて、この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しが受けられる、と証ししています。」**

**先週日曜日の朝日新聞の朝刊の1面に日本の無人の月探査機SLIM（スリム）が月面着陸に成功したことが載っていました。ニュースなどの報道でご存じの方も多いと思います。朝日新聞はこのように記しています。「探査機の月面着陸は日本初で、旧ソ連、米国、中国、インドに次いで5か国目。日本の宇宙開発史における大きな一歩となった。」アメリカのアポロ11号の月面着陸から約50年、まだまだ一般庶民が気軽に宇宙旅行という時代にはなりませんが、いつの日か今の私たちが海外旅行に行くような感覚で「ちょっと月まで旅行に行ってきました」とか「木星まで留学に行ってきます」という時代が来るのかな、その時に「地球は青かった」と誰もが言える時代が来るのかなと夢が膨らむ出来事だと思います。**

**かつて宇宙飛行士の毛利衛さんは宇宙からの帰還後大変印象深い言葉を残されました。**

**それは「宇宙からは国境線は見えなかった」という言葉です。世界地図を見ると国ごとに色分けされて国と国の境に必ず国境線があります。Aという国とBという国を分け隔てるために人間が勝手に作った隔ての壁。それが国境線です。その国境線を勝手に超えようとすることは許されません。そしてその国境線を巡って今まさにロシアとウクライナが争い、イスラエルとパレスチナが争っています。国と国とを分け隔てるために人間が勝手に作った隔ての壁である国境線は遠い宇宙からは見えない、地球というものは一つなんだというこの大切なメッセージは争いが続く今の時代にこそ心に留めておきたいと思うのです。**

**イエス様の時代にも人と人を分け隔てる隔ての壁がありました。それがユダヤ人と異邦人を分ける隔ての壁です。エルサレム神殿には「異邦人の庭」と呼ばれる境内があり、そこは異邦人でも誰でも自由に出入りできる場所でした。しかし、そこに高さ1.2メートルほどの木製の柵が置かれてあり、そこには「これより中に入る異邦人は死刑に処す」と警告文が記されていました。それが「隔ての壁」です。この隔ての壁があるために異邦人は神殿の奥に行って神様を礼拝することはできませんでした。**

**そのような目に見える隔ての壁だけではなくて、ユダヤ人と異邦人には目には見えない心の隔ての壁がありました。ユダヤ人は神に選ばれ神に愛されている特別な民、異邦人はそうでない汚れた民。ユダヤ人にはそのような選民意識がありますから、異邦人と交流することで汚れることを嫌ったのです。ペトロが先週の聖書箇所の28節で「あなたがたもご存じのとおり、ユダヤ人が外国人と交際したり、外国人を訪問したりすることは、律法で禁じられています。」と言った通りです。ですから、最初のキリスト教会もまたユダヤ人とは交流し福音を伝えていたのですが、異邦人とは交流はしないし福音は伝えていなかったのです。意外に思われるかもしれませんが、ペトロを始めとした最初の教会は異邦人に対して分け隔てをし、隔ての壁を作っていたのです。**

**神様はそのような異邦人に対して隔ての壁を作っているペトロに、大きな風呂敷が天からつるされて清い動物清くない動物も一緒に入っている幻を見せ「食べよ」と言われたのでした。そのペトロのもとに異邦人コルネリウスの使いの者たちが来てペトロは彼らと一緒にカイサリアのコルネリウスの家に行きました。コルネリウスから自分を家に招いた次第を聞きました。神様がコルネリウスに現れて下さった幻を聞きました。そしてペトロが語る神の言葉を一言も聞き漏らすまいと、熱心にまた謙虚に耳を傾ける御言葉を求める姿からペトロは確信したのです。**

**「神は人を分け隔てなさらない。ユダヤ人であろうが異邦人であろうがどんな国の人であろうと、神を畏れ神の前に正しいことを行い、祈り愛の業を行う、そしてこのように御言葉を熱心に求める。そのような人を神は分け隔てなく愛して下さる」そのことを確信してコルネリウスに語ったのです。そして36節以降でペトロは説教をするのです。イエス・キリストの十字架と復活の神の愛の福音を語るのです。その説教の内容はかつてペンテコステの時に聖霊に満たされたペトロが色々な国から帰って来たユダヤ人たちに語った内容と同じです。同じ福音を語るのです。**

**そして、ペトロは43節でこのように語ります。**

**「また預言者も皆、イエスについて、この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しが受けられる、と証ししています。」**

**この方、つまりイエス・キリストを信じる者は「誰でも」罪の赦しが受けられる、言い換えれば救われるのです。ユダヤ人だけがイエス・キリストの十字架と復活の福音を信じるなら救われるのではない、誰でもです。異邦人でも、どのような国の人でも分け隔てなく誰でも救われると語るのです。**

**それは今日の旧約聖書のヨエル書3章5節で「しかし、主の御名を呼ぶ者は皆、救われる。」と預言されている通りです。**

**これがペトロが初めてユダヤ人以外に語った説教です。異邦人への初めての説教なのです。イエスはユダヤ人だけの救い主ではなくて異邦人の救い主でもある、イエスは全ての人の救い主なのです。このペトロの説教は今私たちが聞くと当たり前に思いますが、このように語るのはそれまでのペトロからしたら考えられないことでした。先ほど申しましたようにペトロも異邦人を分け隔てをし、隔ての壁を作っていたからです。神は異邦人を愛していないし、異邦人は救われないと思っていたからです。**

**しかし、そのようなペトロが神様の幻とコルネリウスの存在によって、実は分け隔てをしていたのは自分であって神様はユダヤ人であろうが異邦人であろうが分け隔てをなさらない方であることに気づかされたのです。さらにいえばイエス・キリストがその十字架の死と復活によってユダヤ人と異邦人の隔ての壁を取り壊してくださり、全ての人の救い主になってくださったことに気づかされたのでした。そして罪赦されて救われるのにはユダヤ人も異邦人もない、ただイエスキリストの十字架と復活の福音を信じればいいことに気づかされたのです。**

**34節でペトロは「そこで、ペトロは口を開きこう言った。「神は人を分け隔てなさらないことが、よく分かりました。」と最初に言っています。この「よく分かりました」と訳されている言葉は元の言葉では「悟る」とか「理解する」という意味の言葉です。それは頭で理解して納得するというよりも、心で理解して心で悟るという意味の言葉です。「はっ」と気づかされたというのです。神は人を分け隔てなさらないことを「はっ」と気づかされたのです。それって回心です。神様の愛に「はっ」と気づかされて神様の愛に立ち帰るのです。**

**今私たちは10章から「異邦人コルネリウスの回心」と呼ばれる物語から共に御言葉を聞いていますが、実はここは「コルネリウスの回心」であると共に「ペトロの回心」の物語でもあるということができるのです。**

**私たちもペトロと同じように人と人とを分け隔てる隔ての壁を作ってしまっています。**

**これは私の経験上の話ですが、教会の事とかキリスト教に対して良いように思っていない人がいたら、「ああ、この人はキリスト教にいい印象を持っていないのだろうな、キリスト教に隔ての壁を作っているんだろうな。この人にイエス様のことを話しても無駄だろうな。信じてもらえないだろうな」と勝手に決めつけてイエス様のことを話さないことがやはりあります。それはその人が隔ての壁を作っている以上に、私たちがその人に対して何か自分の方で勝手に隔ての壁を作ってしまっているのです。「この人は信じてもらえないだろうな」「この人は救われない」と勝手に決めつけて私たちが隔ての壁を作って話すことをやめてしまうことがあるものです。**

**でもそんなの誰がわかるのでしょうか。この人は救われる、この人は救われない、そんなの私たちにはわからないのです。私たちがこの人は救われないと勝手に思い込んでいる人を救って下さるのかもしれないのです。神様の思いは私たちの思いをはるかに超えているのです。私たちが勝手に作っている隔ての壁を乗り越えてその人にイエス様の福音を届けて下さるかもしれないのです。**

**「神は人を分け隔てなさらない」この事は「宇宙からは国境線は見えなかった」という毛利さんの言葉に通じるものがあると思います。イエス様を信じる私たちと信じない人たちとの間にある隔ての壁、超えるに越えられない心の国境線、実はそのようなものはイエス様からは見えないと思うのです。イエス様には国境線はないのです。この人は救われてほしい、この人は救われてほしくない、イエス様にはそんな分け隔ての国境線は存在しないのです。イエス様から見れば全ての人が信じて救われてほしいという救いの対象、愛の対象なのです。イエス様は全ての人の救いのために十字架に掛かって死んでくださり大きな愛を示して下さったのです。主は全ての人の救い主なのです。**

**「主の御名を呼ぶ者は皆、救われる。」この朝私たちは改めてこの言葉を心に留めて、イエス様の大きな愛を宣べ伝え、愛の証しをしていきたいと思います。**